



へシキヤ 平敷屋 (ヒシチャ)

平敷屋の今昔

平敷屋は、方言でヒシチャといい、勝連半島の東の端、海拔50m〜80mの琉球石灰岩の丘陵高台に位置する集落で「村の高さや平敷屋村」と謳われた。集落内やその周辺からは貝塚時代の居住跡や遺物が出土している。

王国時代には、和文学者平敷屋朝敏が、一時脇地頭をした地としても知られる。その時に農民が水に不自由していることを聞き、ため池を掘らせ、水の便を図ったと伝えられている。その時に掘った土を盛り上げてできたのがタキノーと呼ばれる丘で、この丘は現在整備され、朝敏の功績を讃える記念碑(歌碑・碑文)が建立されている。ここは、太平洋上に浮かぶ近海の島々をはじめ、中城湾はるか知念半島や山原の山なみを見晴らす絶景の地である。

『平敷屋字誌』によれば「平敷屋のトラバーチンは、石材の中でもその優美さで知られ、国会議事堂の正面玄関の柱、皇居の大広間壁面に使用されているのはじめ、多くの建築物に使用されている」とある。

また三百年以上も前から伝わるという平敷屋エイサーは、その振付衣装、出立ちは素朴ななかにも演舞の美しさと迫力は全体的に知られ親しまれている。東の平敷屋港は、津堅島とを結ぶフェリーや漁船が出入りしている。

平敷屋の地名を考える

平敷屋の地名をへ・しき・やに分けて考えてみる。

まず、平敷屋の「へ」は「平」の字が当てられているが、もともとは、辺土、辺野古のように半島や岬、傾斜地を意味する。ここでは、勝連半島をさしていると考えられる。

次に県内の「シキ」のつく地名を取り上げてその位置や形状をまとめると、

①伊敷(糸満市)

与座岳の南西方に位置し、集落北には伊敷城跡があり、標高60m〜70mの琉球石灰岩丘陵に位置する。

②識名(那覇市)

識名台地南西部に位置する。識名園は、琉球国王の別邸で一家の保養や冊封使歓待のために建てられたといわれ、高台の眺望のよいところにある。

③志喜屋(南城市)

知念半島の南部、北部は石灰岩台地、その南側急崖の下から傾斜地が広がる。

④真志喜(宜野湾市)

東シナ海が眺望できる琉球石灰岩台地上に位置する。東側段丘崖下にある森の川は、羽衣伝説で知られる。

⑤平敷(今帰仁村)

本部半島の東北部の台地に位置する。『なきじん研究』(1997年p.7)に「海岸に沿った岸の地のことと思われる」とあり、いわゆる「干し地」だったと思われるが実際は、海岸より内に入ったところの台地に位置する。

以上、列記した「シキ」は、敷・識・志喜などと表記されているがその意味は同じで「段丘・台地」や「崖地」を意味すると考えられる。『古代地名語源辞典』(楠原佑介ほか)は「シキは、頻りに関係し、段丘上の地」としている。

平敷屋のヤは、塩屋、浜屋など場所を示す接尾語で、以上のことから平敷

屋の意味は、先述の「村の高さや平敷屋村」と謳われたように勝連半島の「端(岬)の丘陵台地にあるところ」と考えることができる。

また『琉球国由来記』(1723年)には、「平敷屋」とあり「へシキヤ」であったのがへシキヤのへが訛ってヒになり、キヤがキャ→チャになって方言では「ヒシチャ」と呼ばれるようになった。

ホワイトビーチ

ホワイトビーチは、勝連半島先端部の南側に位置する米海軍基地である。かつて地元では「前の浜」と呼ばれ、白い砂浜と青い海が広がる風光明媚なところだったという。

現在では原子力潜水艦の寄港地と知られているが、先の大戦後間もなく昭和23年にハワイの同胞が郷里沖繩を救済しようと「ハワイ連合沖繩救済会」を立ち上げ、五百五十頭の豚を送った際の上陸地である。

その他半島洋上には、ゴンジャン岩、アギナミ島、また平敷屋には小字地名として「板武座」「美栄間」「嘉真舎」など地名に関心を持つ者の興味をそそる地名が数多く存在する。